

鴻 koh

月刊俳句誌

令和元年6月1日発行
(毎月1回1日発行)
第14巻第6号 通巻156号

6 月号

2019



弥次郎兵衛つつき西東三鬼の忌

糸遊を見るときもなしに見る水辺

川沿ひの花ぼんぼりに百の風

雀降る土堤に烏の豌豆が

虚子の忌を明日にさくらの下にある

あかあかと検番前の花篝

夕焼だんだん雛過ぎの雨の音

枝垂梅しだれて利休忌の夕べ

井戸端に砥石が一つ花の寺

日溜りの池塘に座して虻を打つ

泉まで行こか野焼を見に行こか

ふつと来てふつとさりたる天道虫

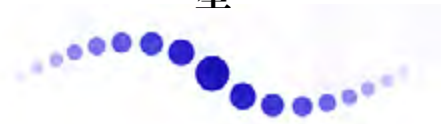
森深く来て小綬鶏のちよつとこい

百の風

主宰作品

増成栗人

荒川心星



斑雪野

南無大師ぼうたんの芽のほつほと
日を選び神饌の田を返しけり
書を閉ぢよ雛月の山晴れたれば
結跏趺坐そびらに春の蟬の声
すみれはこべら林泉の真昼どき
梅一輪二輪真青な峡の空
つらつら椿琴の高音が風に乗る
斑雪野を百歩ほどゆき引き返す

浅蜷桶ありし辺りに目がゆきぬ
やはらかな木の芽の雨に逝かれしか
訃は唐突に忙しげなつばくらめ
月朧眠るに指輪外しけり
あるなしの風見え枝垂桜かな
城跡にをりひんやりと落椿
一叢の葦に足をとられけり
木登りを少女もすなり鳥雲に

浅蜷桶



半谷洋子

鴻 作品抄

畦焼きの臭ひの帽子叩きけり

平野 鏝哉

樵の木に樵の木の風卒業歌

森 祐司

雛の日をきのふに雨のやさしかり

荒井 一代

ぼおんぼおん柱時計の余寒かな

鈴木 崇

北上盆地つんつんと蘆の角

山崎 正子

日溜りに詩片摘むごと土筆摘む

三代川 朋子

風船が梢にだあれも居なくなる

佐藤 あさ子

童唄の音符のやうな春の雪

中島 宙

すみれすみれ聞くとはなしの風の声

藤原 明美

紫たんぽぽ七つの海の記憶かな

藤原 翔

ふるさとは蝦夷あざやかに寒昂

井上 つぐみ

春の雨クロスワードの縦と横

小林 和子

遠く病む母よ夕べの紫木蓮

佐野 久乃

川筋の鶉のコロニーに花の雨

伊藤 真代

継ぎはぎの合切袋桜東風

美濃 律子

句を一つ入れて雛を仕舞ひけり

林 未生

何を焚くけむりか阿武隈川に春

石垣 真理子

開帳の薬師三尊木の芽風

相川 健

亀鳴くと言はれて亀を見てゐたり

小林 良作

伐採の山まつさきに笑ひ出す

倉林 はるこ

ON THE STREET

— 平山雄 —



153

映画『ずぶぬれて犬ころ』

本田孝義・監督 パンドラ・配給



映画『ずぶぬれて犬ころ』の主人公は、俳人の住宅顕信（すみたく・けんしん）だ。一九六一年、岡山市に生まれた顕信は、わずか二八一句を遺して二十五歳でこの世を去った。それゆえ、夭折の俳人、や、「薄幸の俳人」として語られることが多い。彼の人生を考えるとそのような捉え方をされることは仕方ないが、果たして本当に薄命薄幸の俳人だったのだろうか。

映画『ずぶぬれて犬ころ』の試写を観たとき、ふとそんな疑問が湧いた。そうした疑問が浮かぶほど、この映画には奇妙なりアリテイがあった。なぜ奇妙かと言えば、この映画は顕信の不幸な遍歴を忠実に追いつながらも、世にいう薄幸とは少し違う顕信像を浮かび上がらせているからだ。薄幸どころか、映画の顕信は幸せそうにさえ見える。

「合掌するその手が蚊をうつ」
「月明り、青い咳する」
「レントゲンの早春の冷たさを抱く」
「たいくつな病室の窓に雨をいただく」
顕信は十代後半から種田山頭火や尾崎

放哉に傾倒し、二十二歳で出家して浄土真宗本願寺派の僧侶となり、顕信という法名を得た。その頃から顕信を俳号として作句を開始。同時期に結婚するも、二十三歳で急性骨髄性白血病を発症。不治の病を理由に妻の実家から離婚を言い渡され、誕生した長男を病室で育てることになった。

まさに波乱万丈の人生だ。ある意味、悲惨でもある。だが、映画で描かれる顕信は、いたってクールに映る。少年時代からブランド物に身を固め、超然と生きる顕信を裏付けていたのは両親で、彼らは自分たちの貧乏な青春時代の埋め合わせをするように、高度成長期の日本経済の恩恵を息子の顕信に惜しげもなく投じた。顕信の入院生活は何不自由なもの、個室には父母が行き届いた差し入れ

波乱に満ちた生涯を広く知られているので、自由律俳句を読むと、どうしても彼らのイメージが重なってくる。もっと言えば、顕信は山頭火や放哉の人生に憧れ、俳句のスタイルを真似ようとした。両親のせいもあるが、託託なく育った顕信は、放浪や極貧とはかけ離れた境遇であったにも関わらず、薄幸の影を含んだ句を作ったかっただのかもしれない。

もちろん死病に陥った人間であるから、幸福感に満たされることはなかっただろう。ただ顕信が詠っていたのは、自分の不幸そのものではないように思う。山頭火や放哉に自分の句を重ねることで、不幸の肩代わりをしてもらっていたような気配がある。アースのように、不幸の静電気を地面に逃がしていたように感じるのだ。その地面とは、自由律俳句。憧れの俳句の形を真似ることで、不幸や逆境を他人事にしてしまう。ヒーローやアイドルのファンによくある悲しい心理操作だ。それを成就するには、徹底的に真似る必要があった。そのために

顕信が先人の自由律をどれだけ研究したかは、彼の遺した句群を見れば明らかだ。「酔った月が出ている」

「窓に映る顔が春になれない」
「裸をふいてもらい月にのぞかれていた」
自由律研究の成果はこうした句に顕われ、以下の顕信の代表句の下敷きとなる。「ずぶぬれて犬ころ」

「若さとはこんな淋しい春なのか」
「夜が淋しくて誰かが笑いはじめた」
「気の抜けたサイダーが僕の人生」
映画のタイトルになった「ずぶぬれて」の句には、山頭火や放哉のような句を得られたという一種のヒロイズムを感じ

る。「若さとは」や「夜が淋しくて」にも同様の心象がある。こうした自己陶醉は、若さから来るものだろう。だから余計に「気の抜けた」という素朴な一句が、多くを語っているように思う。僕が顕信の人生を、杓子定規に薄幸とするには当たらないと思うのは、こうした句があるからだ。「深夜の細い針が血管を探している」

を持参し、来客があれば喫茶店からコーヒーを出前してもらったりする。どこかの大きな会社の役員の療養生活のように見える。

「影もそまつな食事をしている」
「面会謝絶の戸を開けて冬がやってくる」
「何もできない身体で親不孝している」
どこまでが事実なのか、創作なのか。顕信の句にその境目を見ることは難しい。句にアリテイがあるように感じられるのは、自由律という形式から来ているように思われる。山頭火や放哉はその

「レントゲンに淋しい胸のうちのぞかれた」
これらの句はまさに顕信ならではの表現で、心に残る。

映画の脚本を手掛けた山口文子は、歌人であり、俳句に理解を示しながらも、あくまで客観的に顕信を描こうとする。俳句が唯一の自己表現の手段だった顕信とは異なり、山口はいい意味で「たかが俳句」という突っ放した姿勢で顕信を描く。それが功を奏して、映画に奇妙なりアリテイが生まれた。

顕信の「たかが俳句」とは言えない状況の是非を言うつもりはない。だが、僕がこの映画に感じた違和感、事実と創作の境目、リアリテイの源はそこに在る。これまで一般に語られてきた薄幸な顕信とは一線を画す『ずぶぬれて犬ころ』は、六月一日から渋谷ユークロススペースで公開される。非常に興味深い映画なので、機会があればぜひ観て欲しい。そして令和も俳句を楽しみましょう。「何もないポケットに手がある 顕信」

谷口摩耶

花の香子堅

花辛夷散るよ川村美術館
レストランの重き扉や花の雨
窓枠が額縁となり今年竹
いつの間に雨の上がりし花ミモザ
堅香子の花に触るるをためらひぬ
鶯の声をまあるく響かせて
満天星の花を鳴らしに風のくる
シャガールの絵の残像か飛花落花

ちよつとそごまで

第1回

10

「横須賀・想像力と数十円」

鈴木 崇

京急線横須賀中央駅の東口改札を出ると、目の前は駅前デッキ、右に進むと「若松マーケット」と書かれた提灯のアーチが見えてくる。戦後まもなくは生活市場として発展してきた街。今でも昭和レトロな面影を残す飲食店街である。

昼間歩けば昼オケの歌声が流れてきて、夕方からは居酒屋の灯りがともる。夜が更ければスナックやバーの看板が妖しく誘う。ブランドをジンジャーエールで割った「横須賀ブラジャー」で最近売り出「中だ。

この飲食店街の路地にかつて古本屋が数件あった。安く本を手に入れるため、水商売の雰囲気ドキドキしながらよく通った。なかでも「堀川書店」は忘れられない。

ほとんど露店に近い軒先に本が並べられていた。ジャンル分けなど一切なし、全集の端本と一昔前のベストセラーと掘り出し物が無造作に陳列されている。付け値を見ると、ほとんどが五十円とか八十円。「想像力と数百

円」という新潮文庫のキャッチコピーが昔あったがこの店の場合「想像力と数十円」である。

駄菓子のような値段で本を買い読み漁ることが私の読書体験を作ったように思う。もちろん新刊本も血肉になっっているはずだが、安価で手に入れたものに心動かされるのが読書の醍醐味のような気がする。

どぶ板通りを抜けてJR横須賀線横須賀駅を目指して歩くと横須賀港に面した「ヴェルニ公園」に出る。バラがきれいな公園だ。アメリカ海軍施設と自衛隊基地に停泊する艦船が間近に見える。園内にはひっそりと正岡子規の句碑がある。

横須賀や只帆橋の冬木立 子規
港内に連なる帆柱の印象を詠んだ。訪れたのは明治二十一年八月。マストを冬木立に見立てたわけだが、横須賀の海には蕭条とした雰囲気が合っている気もする。
この年、子規は二十一歳であり、書物を



乱読し、寄席に通い、野球に熱中する日々を送っていた。落語の話題で夏目漱石との交友が始まるのは翌年のことである。

JR横須賀線横須賀駅は構内に階段のないバリアフリー駅で、のどかな雰囲気と地元でありながら旅情に誘われる。この駅は芥川龍之介『蜜柑』の舞台でもある。

「或曇った冬の日暮である。私は横須賀発上り二等客車の隅に腰を下して、ぼんやり発車の笛を待っていた。」

実際の体験をもとに書かれたそうだが、ここでの横須賀もやはり蕭条としている。

『蜜柑』が収録された手元の新潮文庫、どこで購入したのか記憶にないが、奥付の右上には五十円と書かれていた。

薬庵閑話 12

虫丸



先生
若いの
だから
自分だけの
オリジナルな言葉を
使って言われたん
ですけど！
自分だけの言葉って
どう考えたら
いいんでしょう

「あいつら
書いて」



チョッピリ
悪地悪な
見方をすれば
大勢の人に使われた
ものが「言葉」なのだから
秘密に言えば
自分だけの言葉という
ものは存在しない



言葉と言葉のつながりで
文字の意味
以上の深い
おもむきを
しのばせられたら
それが自分だけの
言葉であり
オリジナルじゃないんだよ

ナルホド!!



ようするに
つながりを「サンビヤ
ニンニクとかで
オリジナルの蕎麦を
作ることですね